

その收伯の舌のあはさ言によりて剣にたふれた彼らに之を分たためにエツラトの國にて嘲笑をうくべし
 三
 三ツバをなんぢの口にあてよ敵の口を閉ぢたためにエツラトの國にて嘲笑をうくべし
 四
 わが律法を犯じくわよる 三 かしら我にむかひてわが神よわれらエツラトの民をばれりて問を九
 一エツラエルの巖をいみきら入り敵これを退ん かしら王をたてたり然れども我亦よりて立しにおもすか
 れら收伯をたてたり然れども我がまらざるごとくなり彼らまたうの金銀をもて已がために偶像をつくれ
 りの遣れるの毀ちすてられんが爲をせしにこそならず サマリヤなぢの慣ひ思きらふべきものか
 りわが怒かれらおむかひて燃ゆかれら何れの時にか罪なきにいたらん この慣ひエツラエルより出づ匠
 人のつくれる者おして神おわらずサマリヤの慣ひくだけて粉となりん かれら風のまきて狂風をかり
 さらん種とて方の生長る穀物さくらの穂のみらざるべしとて以實るども他邦人これを吞ん エツラ
 三
 三ルハ既に吞またり彼等いす列國の中において愧てば逃ざる端のてどく視做るなり 彼らハ獨れし野の
 三
 三驢馬のてどくアツリヤおゆけりエツラエルの物を飽りて戀人を得たり かれら列國の民本物を飽りた
 りと雖も今われ彼等をつき入集む彼らハ諸侯伯の王に負せらるる重擔のためお裏へ始めん エツラエ
 三
 三ハ多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭壇のかわらぬ罪に陥るにあらん 我かれらのために律法をま
 るして條件の簡便を示したれど彼らハ反て之を異物と爲もへり かれらハ我に獻ふべき物を獻ふれども
 三
 三只角をうなへて巴かつから之を食ふエツラエルの之を納たれ亦今かれらの愆を記彼らの罪を罰したまはれ
 三
 三彼らハエツラエトに歸るべし エツラエルハ已遣主を忘れてもろくの神廟を建てエツラエルの城をどりま
 三
 三せる邑を多く増し加へたり然ぞわれ火をろの邑々おふくりて諸の城を焼じさん

イ 何西九章一節
 ロ 何西九章二節
 ハ 何西九章三節
 ニ 何西九章四節
 ホ 何西九章五節
 ヘ 何西九章六節
 セ 何西九章七節
 シ 何西九章八節
 ス 何西九章九節
 ツ 何西九章十節
 テ 何西九章十一節
 ト 何西九章十二節
 ナ 何西九章十三節
 ニ 何西九章十四節
 ホ 何西九章十五節
 ヘ 何西九章十六節
 セ 何西九章十七節
 シ 何西九章十八節
 ス 何西九章十九節
 ツ 何西九章二十節
 テ 何西九章二十一節
 ト 何西九章二十二節
 ナ 何西九章二十三節
 ニ 何西九章二十四節
 ホ 何西九章二十五節
 ヘ 何西九章二十六節
 セ 何西九章二十七節
 シ 何西九章二十八節
 ス 何西九章二十九節
 ツ 何西九章三十節
 テ 何西九章三十一節
 ト 何西九章三十二節
 ナ 何西九章三十三節
 ニ 何西九章三十四節
 ホ 何西九章三十五節
 ヘ 何西九章三十六節
 セ 何西九章三十七節
 シ 何西九章三十八節
 ス 何西九章三十九節
 ツ 何西九章四十節
 テ 何西九章四十一節
 ト 何西九章四十二節
 ナ 何西九章四十三節
 ニ 何西九章四十四節
 ホ 何西九章四十五節
 ヘ 何西九章四十六節
 セ 何西九章四十七節
 シ 何西九章四十八節
 ス 何西九章四十九節
 ツ 何西九章五十節
 テ 何西九章五十一節
 ト 何西九章五十二節
 ナ 何西九章五十三節
 ニ 何西九章五十四節
 ホ 何西九章五十五節
 ヘ 何西九章五十六節
 セ 何西九章五十七節
 シ 何西九章五十八節
 ス 何西九章五十九節
 ツ 何西九章六十節
 テ 何西九章六十一節
 ト 何西九章六十二節
 ナ 何西九章六十三節
 ニ 何西九章六十四節
 ホ 何西九章六十五節
 ヘ 何西九章六十六節
 セ 何西九章六十七節
 シ 何西九章六十八節
 ス 何西九章六十九節
 ツ 何西九章七十節
 テ 何西九章七十一節
 ト 何西九章七十二節
 ナ 何西九章七十三節
 ニ 何西九章七十四節
 ホ 何西九章七十五節
 ヘ 何西九章七十六節
 セ 何西九章七十七節
 シ 何西九章七十八節
 ス 何西九章七十九節
 ツ 何西九章八十節
 テ 何西九章八十一節
 ト 何西九章八十二節
 ナ 何西九章八十三節
 ニ 何西九章八十四節
 ホ 何西九章八十五節
 ヘ 何西九章八十六節
 セ 何西九章八十七節
 シ 何西九章八十八節
 ス 何西九章八十九節
 ツ 何西九章九十節

一 エツラエルト異邦人のてどく喜びすさむ勿れなんが淫行をなして汝の神を離る汝すべての妻
 三
 三の打擲にて賜る淫行の賞賜を愛せり 二 打擲と酒醉とハかれらを養ふに亦わたりし酒もむかしくか
 三
 三ん かれらハエツラエルの地にどまらばエツラエルトに歸りアツリヤにて汚穢なる物を食さん
 三
 三彼等ハエツラエルトにむかひて酒を灌ぐべき者にあらざるの祭物ハエツラエルトの悦びたまふ所にあらまかれら
 三
 三儀牲ハ喪に居ものハバのてどく凡てこれを食ふものハ浮るべし彼等ハバの只おのが食ふためにのみ
 三
 三用うべくしてエツラエルの家に入るべきわあらず なんから集會の日とエツラエルの節會の日ハ何れをささん
 三
 三るや 祝よかれら滅亡の故によりて去ゆけぬ エツラエルトかれらをおつめメヒエスかれらに華らん疾癘かれ
 三
 三ら銀の寶物を獲いばら彼らの天幕に變らん 刑罰の日きたり應報の日きたれり エツラエルトこれを知ん
 三
 三預言者の愚かるもの靈に感したるものなりこれさなちの悪まはく汝の怨恨おほいかるに因る
 三
 三エツラエルトハ我が神にらべて他の神をも仰望り預言者の一切の途ハ鳥を捕ふる者の網のてどく且
 三
 三の神の室の中かて怨恨を懷けり 九 かれらハギヰツの日のおどく甚だしく惡き事を行かへり エツラエ
 三
 三の惡をこころに記てその罪を罰したまはん 在昔われエツラエルトを見ること荒野の葡萄のてどく汝ら
 三
 三先祖等々を看ること無花果樹の始にむすべる最先の果のてどくなくしに彼等ハバツラエルトにゆきて身を
 三
 三恥辱にゆだねるの愛する物とともには憎むべき者となされり エツラエルトの榮光ハ鳥のてどく飛ざらん則
 三
 三ち産てども孕びてども妊娠てどもなかるべし 假令かれら子等を育るども我らの子を興ひて還る人なき
 三
 三にいたらしめん我が離るる時かれらの禍大いなる哉 われエツラエルトを美地お植てツツロのてどくなく
 三
 三かどもエツラエルトハその子等を携へいだして人を殺す者お付さんぞす エツラエルト彼らに興へたまへ爾亦

イ 何西九章一節
 ロ 何西九章二節
 ハ 何西九章三節
 ニ 何西九章四節
 ホ 何西九章五節
 ヘ 何西九章六節
 セ 何西九章七節
 シ 何西九章八節
 ス 何西九章九節
 ツ 何西九章十節
 テ 何西九章十一節
 ト 何西九章十二節
 ナ 何西九章十三節
 ニ 何西九章十四節
 ホ 何西九章十五節
 ヘ 何西九章十六節
 セ 何西九章十七節
 シ 何西九章十八節
 ス 何西九章十九節
 ツ 何西九章二十節
 テ 何西九章二十一節
 ト 何西九章二十二節
 ナ 何西九章二十三節
 ニ 何西九章二十四節
 ホ 何西九章二十五節
 ヘ 何西九章二十六節
 セ 何西九章二十七節
 シ 何西九章二十八節
 ス 何西九章二十九節
 ツ 何西九章三十節
 テ 何西九章三十一節
 ト 何西九章三十二節
 ナ 何西九章三十三節
 ニ 何西九章三十四節
 ホ 何西九章三十五節
 ヘ 何西九章三十六節
 セ 何西九章三十七節
 シ 何西九章三十八節
 ス 何西九章三十九節
 ツ 何西九章四十節
 テ 何西九章四十一節
 ト 何西九章四十二節
 ナ 何西九章四十三節
 ニ 何西九章四十四節
 ホ 何西九章四十五節
 ヘ 何西九章四十六節
 セ 何西九章四十七節
 シ 何西九章四十八節
 ス 何西九章四十九節
 ツ 何西九章五十節
 テ 何西九章五十一節
 ト 何西九章五十二節
 ナ 何西九章五十三節
 ニ 何西九章五十四節
 ホ 何西九章五十五節
 ヘ 何西九章五十六節
 セ 何西九章五十七節
 シ 何西九章五十八節
 ス 何西九章五十九節
 ツ 何西九章六十節
 テ 何西九章六十一節
 ト 何西九章六十二節
 ナ 何西九章六十三節
 ニ 何西九章六十四節
 ホ 何西九章六十五節
 ヘ 何西九章六十六節
 セ 何西九章六十七節
 シ 何西九章六十八節
 ス 何西九章六十九節
 ツ 何西九章七十節
 テ 何西九章七十一節
 ト 何西九章七十二節
 ナ 何西九章七十三節
 ニ 何西九章七十四節
 ホ 何西九章七十五節
 ヘ 何西九章七十六節
 セ 何西九章七十七節
 シ 何西九章七十八節
 ス 何西九章七十九節
 ツ 何西九章八十節
 テ 何西九章八十一節
 ト 何西九章八十二節
 ナ 何西九章八十三節
 ニ 何西九章八十四節
 ホ 何西九章八十五節
 ヘ 何西九章八十六節
 セ 何西九章八十七節
 シ 何西九章八十八節
 ス 何西九章八十九節
 ツ 何西九章九十節

二	千四百一十六
三	千四百一十五
四	千四百一十四
五	千四百一十三
六	千四百一十二
七	千四百一十一
八	千四百一十
九	千四百九
十	千四百八
十一	千四百七
十二	千四百六
十三	千四百五
十四	千四百四
十五	千四百三
十六	千四百二
十七	千四百一
十八	千四百
十九	千三百九十九
二十	千三百九十八
二十一	千三百九十七
二十二	千三百九十六
二十三	千三百九十五
二十四	千三百九十四
二十五	千三百九十三
二十六	千三百九十二
二十七	千三百九十一
二十八	千三百九十
二十九	千三百八十九
三十	千三百八十八
三十一	千三百八十七
三十二	千三百八十六
三十三	千三百八十五
三十四	千三百八十四
三十五	千三百八十三
三十六	千三百八十二
三十七	千三百八十一
三十八	千三百八十
三十九	千三百七十九
四十	千三百七十八
四十一	千三百七十七
四十二	千三百七十六
四十三	千三百七十五
四十四	千三百七十四
四十五	千三百七十三
四十六	千三百七十二
四十七	千三百七十一
四十八	千三百七十
四十九	千三百六十九
五十	千三百六十八
五十一	千三百六十七
五十二	千三百六十六
五十三	千三百六十五
五十四	千三百六十四
五十五	千三百六十三
五十六	千三百六十二
五十七	千三百六十一
五十八	千三百六十
五十九	千三百五十九
六十	千三百五十八
六十一	千三百五十七
六十二	千三百五十六
六十三	千三百五十五
六十四	千三百五十四
六十五	千三百五十三
六十六	千三百五十二
六十七	千三百五十一
六十八	千三百五十
六十九	千三百四十九
七十	千三百四十八
七十一	千三百四十七
七十二	千三百四十六
七十三	千三百四十五
七十四	千三百四十四
七十五	千三百四十三
七十六	千三百四十二
七十七	千三百四十一
七十八	千三百四十
七十九	千三百三十九
八十	千三百三十八
八十一	千三百三十七
八十二	千三百三十六
八十三	千三百三十五
八十四	千三百三十四
八十五	千三百三十三
八十六	千三百三十二
八十七	千三百三十一
八十八	千三百三十
八十九	千三百二十九
九十	千三百二十八
九十一	千三百二十七
九十二	千三百二十六
九十三	千三百二十五
九十四	千三百二十四
九十五	千三百二十三
九十六	千三百二十二
九十七	千三百二十一
九十八	千三百二十
九十九	千三百一十九
一百	千三百一十八

にを與へんとす。たゞや孕まざる胎に乳なき乳房を與へたまへ。かれら凡の惡いガルガレにあり。此故に我かして之を惡めり。その行爲わしけれバ我當家より逐いだして棄する。とをせし。その牧伯等。ひみき憐れる者。奇り。エライムに聖れ。その根り。かれ。て果を結ぶ。まじ。若し。産とせら。バ。我の胎。ある。愛しむ。實を。授さん。た。かれ。聽從。せざる。に。より。て。我。當。神。これ。を。棄。たま。ふ。べし。かれ。ら。列。國。民。の。うち。流。離。人。ぞ。あらん。

第二節 エライムに果をむすびて。茂り榮る葡萄の樹の果の多くあるが。まじ。に。祭壇を。まじ。の。地。の。鏡。かな。る。が。まじ。も。偶像。を。美。しく。せり。かれ。ら。心。を。い。だ。け。り。今。かれ。ら。罪。せ。ら。る。べし。神。の。祭壇。を。打。毀。ち。の。偶。像。を。打。棄。た。ま。え。ん。かれ。ら。今。い。ふ。べし。我。佛。神。を。畏。れ。ざ。り。し。に。因。て。我。ら。に。玉。か。し。の。玉。の。わ。れ。ら。の。た。め。に。何。を。か。さ。ん。と。かれ。ら。の。虚。し。き。言。を。い。だ。し。僞。り。の。誓。を。か。し。て。約。を。た。つ。審。判。之。烟。の。敵。に。も。之。づ。る。酋。長。の。ご。と。し。サ。リ。ア。の。居。民。ハ。ベ。ラ。ア。の。積。の。故。に。よ。り。て。戰。慄。か。ん。の。の。民。之。れ。を。憐。れ。公。祭。司。等。の。の。築。の。う。せ。た。る。が。爲。に。か。げ。か。ん。積。ハ。ア。ス。リ。ヤ。に。携。へ。ら。れ。禮。物。と。し。て。ヤ。レ。フ。王。に。獻。け。ら。る。べし。エライムの。罪。を。か。ら。う。む。り。エライム。の。計。議。を。恥。れ。サ。リ。ア。は。ろ。び。の。玉。の。水。の。う。の。末。片。の。ご。と。し。ハ。エライム。の。罪。か。る。ア。ベ。の。崇。間。ハ。荒。て。く。荆棘。と。蕪。蕪。り。れ。壇。の。う。へ。に。は。之。茂。ら。ん。の。時。か。れ。ら。山。に。む。か。ひ。て。我。像。を。棄。は。へ。險。に。む。か。ひ。て。我。像。の。う。へ。に。倒。れ。よ。い。と。ん。エライム。よ。汝。の。キ。ベ。ア。の。日。よ。り。罪。を。か。せ。り。彼。等。の。う。へ。に。立。り。罪。惡。の。ひ。と。く。を。攻。た。ん。し。戰。争。の。キ。ベ。ア。に。て。か。れ。ら。に。及。ぶ。ざ。り。き。我。思。ふ。ま。じ。に。彼。等。を。い。ま。し。め。ん。彼。等。の。二。の。罪。に。つ。か。れ。ん。時。も。ろ。の。の。民。あ。つ。ま。り。て。之。を。せ。め。ん。エライム。の。脚。が。た。れ。た。牛。の。ご。と。く。に。し。て。轂。を。よ。む。ひ。と。を。好。む。む。び。ざ。れ。ど。わ。れ。の。美。し。き。頸。に。物。を。負。し。む。

一	千三百一十九
二	千三百一十八
三	千三百一十七
四	千三百一十六
五	千三百一十五
六	千三百一十四
七	千三百一十三
八	千三百一十二
九	千三百一十一
十	千三百一十
十一	千三百九
十二	千三百八
十三	千三百七
十四	千三百六
十五	千三百五
十六	千三百四
十七	千三百三
十八	千三百二
十九	千三百一
二十	千三百
二十一	千二百九十九
二十二	千二百九十八
二十三	千二百九十七
二十四	千二百九十六
二十五	千二百九十五
二十六	千二百九十四
二十七	千二百九十三
二十八	千二百九十二
二十九	千二百九十一
三十	千二百九十
三十一	千二百八十九
三十二	千二百八十八
三十三	千二百八十七
三十四	千二百八十六
三十五	千二百八十五
三十六	千二百八十四
三十七	千二百八十三
三十八	千二百八十二
三十九	千二百八十一
四十	千二百八十
四十一	千二百七十九
四十二	千二百七十八
四十三	千二百七十七
四十四	千二百七十六
四十五	千二百七十五
四十六	千二百七十四
四十七	千二百七十三
四十八	千二百七十二
四十九	千二百七十一
五十	千二百七十
五十一	千二百六十九
五十二	千二百六十八
五十三	千二百六十七
五十四	千二百六十六
五十五	千二百六十五
五十六	千二百六十四
五十七	千二百六十三
五十八	千二百六十二
五十九	千二百六十一
六十	千二百六十
六十一	千二百五十九
六十二	千二百五十八
六十三	千二百五十七
六十四	千二百五十六
六十五	千二百五十五
六十六	千二百五十四
六十七	千二百五十三
六十八	千二百五十二
六十九	千二百五十一
七十	千二百五十
七十一	千二百四十九
七十二	千二百四十八
七十三	千二百四十七
七十四	千二百四十六
七十五	千二百四十五
七十六	千二百四十四
七十七	千二百四十三
七十八	千二百四十二
七十九	千二百四十一
八十	千二百四十
八十一	千二百三十九
八十二	千二百三十八
八十三	千二百三十七
八十四	千二百三十六
八十五	千二百三十五
八十六	千二百三十四
八十七	千二百三十三
八十八	千二百三十二
八十九	千二百三十一
九十	千二百三十
九十一	千二百二十九
九十二	千二百二十八
九十三	千二百二十七
九十四	千二百二十六
九十五	千二百二十五
九十六	千二百二十四
九十七	千二百二十三
九十八	千二百二十二
九十九	千二百二十一
一百	千二百二十

にを與へんとす。たゞや孕まざる胎に乳なき乳房を與へたまへ。かれら凡の惡いガルガレにあり。此故に我かして之を惡めり。その行爲わしけれバ我當家より逐いだして棄する。とをせし。その牧伯等。ひみき憐れる者。奇り。エライムに聖れ。その根り。かれ。て果を結ぶ。まじ。若し。産とせら。バ。我の胎。ある。愛しむ。實を。授さん。た。かれ。聽從。せざる。に。より。て。我。當。神。これ。を。棄。たま。ふ。べし。かれ。ら。列。國。民。の。うち。流。離。人。ぞ。あらん。

第二節 エライムに果をむすびて。茂り榮る葡萄の樹の果の多くあるが。まじ。に。祭壇を。まじ。の。地。の。鏡。かな。る。が。まじ。も。偶像。を。美。しく。せり。かれ。ら。心。を。い。だ。け。り。今。かれ。ら。罪。せ。ら。る。べし。神。の。祭壇。を。打。毀。ち。の。偶。像。を。打。棄。た。ま。え。ん。かれ。ら。今。い。ふ。べし。我。佛。神。を。畏。れ。ざ。り。し。に。因。て。我。ら。に。玉。か。し。の。玉。の。わ。れ。ら。の。た。め。に。何。を。か。さ。ん。と。かれ。ら。の。虚。し。き。言。を。い。だ。し。僞。り。の。誓。を。か。し。て。約。を。た。つ。審。判。之。烟。の。敵。に。も。之。づ。る。酋。長。の。ご。と。し。サ。リ。ア。の。居。民。ハ。ベ。ラ。ア。の。積。の。故。に。よ。り。て。戰。慄。か。ん。の。の。民。之。れ。を。憐。れ。公。祭。司。等。の。の。築。の。う。せ。た。る。が。爲。に。か。げ。か。ん。積。ハ。ア。ス。リ。ヤ。に。携。へ。ら。れ。禮。物。と。し。て。ヤ。レ。フ。王。に。獻。け。ら。る。べし。エライムの。罪。を。か。ら。う。む。り。エライム。の。計。議。を。恥。れ。サ。リ。ア。は。ろ。び。の。玉。の。水。の。う。の。末。片。の。ご。と。し。ハ。エライム。の。罪。か。る。ア。ベ。の。崇。間。ハ。荒。て。く。荆棘。と。蕪。蕪。り。れ。壇。の。う。へ。に。は。之。茂。ら。ん。の。時。か。れ。ら。山。に。む。か。ひ。て。我。像。を。棄。は。へ。險。に。む。か。ひ。て。我。像。の。う。へ。に。倒。れ。よ。い。と。ん。エライム。よ。汝。の。キ。ベ。ア。の。日。よ。り。罪。を。か。せ。り。彼。等。の。う。へ。に。立。り。罪。惡。の。ひ。と。く。を。攻。た。ん。し。戰。争。の。キ。ベ。A。に。て。か。れ。ら。に。及。ぶ。ざ。り。き。我。思。ふ。ま。じ。に。彼。等。を。い。ま。し。め。ん。彼。等。の。二。の。罪。に。つ。か。れ。ん。時。も。ろ。の。の。民。あ。つ。ま。り。て。之。を。せ。め。ん。エライム。の。脚。が。た。れ。た。牛。の。ご。と。く。に。し。て。轂。を。よ。む。ひ。と。を。好。む。む。び。ざ。れ。ど。わ。れ。の。美。し。き。頸。に。物。を。負。し。む。

とをせし我かざねてエホバに身を任せし我にありて神かれは我のうちにありて
 者なりいかりをもて隠まじかれら獅子の吼るごとくに聲を出したまふエホバも隨ひて歩まんエホバ
 聲を出したまふハ子等ハ西より急ぎ来らんかれらエホバトより鳥のごとくアスリヤより鶴のごとく
 に急ぎ来らん我かれら我々の家々に住てをむべし是エホバの聖言なりエホバの聖言をもてイスラ
 エルの家の群像をもて我を圍めりユダの神と信ある聖者どもに屬みつかまみ漂蕩をれり
 雷轟雷轟エホバの風をくろひ東風をふひ日々詐偽と暴逆をば増くはアスリヤと契約を絶
 び油をエホバに饑れりエホバハエダと争辨をふしたまふアホバをろの途を去たごひて罰しるの行爲
 に去たごひて報いたたまふアホバハ時々の兄弟の腫をどらへまじ己の力をもて神と角力あらう
 へりかれハ天の使と角力あらうひて勝あきて之に恩をもどめたり彼ハテラに於て神にあり其處にて
 神われらに語ひたまへりこれハ萬軍の神エホバなり其記念の名なり然ハあなた方の神にかへ
 り祭恤と公義とをせり恒ハあなた方の神を仰ぐべし彼ハカナン人(商賈)なりその手に詭詐の權衡をも
 大好でお喜び取ごをさすエホバハハの誠にわれに富る者ぞかれり我ハ身に用寶を受たハ凡て
 わが勝れたるごの中お罪をうべき不義を見いだす者かあるべし我エホバハエホバの國をいでしよ
 り以來あなた方の神あり我いまでも尙あなた方を慕屋おすまてて節會の日のごとくならしめん我もつら
 ろの預言者にかたり又これに益を爲はく異象をまめたり我もつら預言者も托して譬喩をまうく
 ギレバアの不義ある者からずや彼らハ人全く虚しかれらハギルガルにて牛を犠牲に獻ぐかれらの祭壇ハ圍
 の畝おつみたる石の如しヤコブハアアの野におにげゆけりイスラエルの妻を得たために人お事へ妻を

九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇 一〇〇一 一〇〇二 一〇〇三 一〇〇四 一〇〇五 一〇〇六 一〇〇七 一〇〇八 一〇〇九 一〇一〇 一〇一一 一〇一二 一〇一三 一〇一四 一〇一五 一〇一六 一〇一七 一〇一八 一〇一九 一〇二〇 一〇二一 一〇二二 一〇二三 一〇二四 一〇二五 一〇二六 一〇二七 一〇二八 一〇二九 一〇三〇 一〇三一 一〇三二 一〇三三 一〇三四 一〇三五 一〇三六 一〇三七 一〇三八 一〇三九 一〇四〇 一〇四一 一〇四二 一〇四三 一〇四四 一〇四五 一〇四六 一〇四七 一〇四八 一〇四九 一〇五〇 一〇五一 一〇五二 一〇五三 一〇五四 一〇五五 一〇五六 一〇五七 一〇五八 一〇五九 一〇六〇 一〇六一 一〇六二 一〇六三 一〇六四 一〇六五 一〇六六 一〇六七 一〇六八 一〇六九 一〇七〇 一〇七一 一〇七二 一〇七三 一〇七四 一〇七五 一〇七六 一〇七七 一〇七八 一〇七九 一〇八〇 一〇八一 一〇八二 一〇八三 一〇八四 一〇八五 一〇八六 一〇八七 一〇八八 一〇八九 一〇九〇 一〇九一 一〇九二 一〇九三 一〇九四 一〇九五 一〇九六 一〇九七 一〇九八 一〇九九 一一〇〇 一一〇一 一一〇二 一一〇三 一一〇四 一一〇五 一一〇六 一一〇七 一一〇八 一一〇九 一一一〇 一一一一 一一一二 一一一三 一一一四 一一一五 一一一六 一一一七 一一一八 一一一九 一一二〇 一一二一 一一二二 一一二三 一一二四 一一二五 一一二六 一一二七 一一二八 一一二九 一一三〇 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四 一一三五 一一三六 一一三七 一一三八 一一三九 一一四〇 一一四一 一一四二 一一四三 一一四四 一一四五 一一四六 一一四七 一一四八 一一四九 一一五〇 一一五一 一一五二 一一五三 一一五四 一一五五 一一五六 一一五七 一一五八 一一五九 一一六〇 一一六一 一一六二 一一六三 一一六四 一一六五 一一六六 一一六七 一一六八 一一六九 一一七〇 一一七一 一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八 一一七九 一一八〇 一一八一 一一八二 一一八三 一一八四 一一八五 一一八六 一一八七 一一八八 一一八九 一一九〇 一一九一 一一九二 一一九三 一一九四 一一九五 一一九六 一一九七 一一九八 一一九九 一二〇〇 一二〇一 一二〇二 一二〇三 一二〇四 一二〇五 一二〇六 一二〇七 一二〇八 一二〇九 一二一〇 一二一一 一二一二 一二一三 一二一四 一二一五 一二一六 一二一七 一二一八 一二一九 一二二〇 一二二一 一二二二 一二二三 一二二四 一二二五 一二二六 一二二七 一二二八 一二二九 一二三〇 一二三一 一二三二 一二三三 一二三四 一二三五 一二三六 一二三七 一二三八 一二三九 一二四〇 一二四一 一二四二 一二四三 一二四四 一二四五 一二四六 一二四七 一二四八 一二四九 一二五〇 一二五一 一二五二 一二五三 一二五四 一二五五 一二五六 一二五七 一二五八 一二五九 一二六〇 一二六一 一二六二 一二六三 一二六四 一二六五 一二六六 一二六七 一二六八 一二六九 一二七〇 一二七一 一二七二 一二七三 一二七四 一二七五 一二七六 一二七七 一二七八 一二七九 一二八〇 一二八一 一二八二 一二八三 一二八四 一二八五 一二八六 一二八七 一二八八 一二八九 一二九〇 一二九一 一二九二 一二九三 一二九四 一二九五 一二九六 一二九七 一二九八 一二九九 一三〇〇 一三〇一 一三〇二 一三〇三 一三〇四 一三〇五 一三〇六 一三〇七 一三〇八 一三〇九 一三一〇 一三一〇

にどめめるの恥辱をかれに歸せたまはれ
 得んためお手を收りエホバ一人の預言者をもてイスラエルをエホバの導きいだし一人の預言者をも
 て之を護りたまへりエホバ一人の怒を激ふるご極て之をばだしるの主かれが流しく血をかれが上
 にどめめるの恥辱をかれに歸せたまはれ
 罪を犯して死たりしが今尙あらず罪を犯しよの銀をもて己のために像を鑄るの技巧に於て偶
 像を作る是みな工人の作なるあり彼らに之につきていふ犠牲を獻ぐる者ハこの慣わしを接べし是に
 よりて彼らハ朝の雲のごとく速く去り露のごとく打場より大風に吹散さるる穀のごとく窓より
 出ゆく煙のごとくならんされど我ハエホバの國をいでより以來あなた方の神エホバなり爾われの
 外に神を知ごなどなし我のほかに救者なし我はさきに荒野にて水あき地にて爾を顧みたりかれらハ
 よりて食に飽き飽きによりて心の心たかびり是れおよりて我を忘れたり斯るがゆゑに我かれらに對ひて獅
 子のごとくなり途の傍にひうみろかお獅子のごとくならんれれ子をうしなへる熊のごとく彼らに向ひ
 てろの心腹を裂き獅子のごとくこれを食せん野の獸これを探斷るべしイスラエルよ汝の滅ぶるハ我ハ
 背き汝を助くる者に背が故なり汝のもろくの邑に汝を助ぐべき汝の王ハ今いづくにかあるなんぢら
 がろの王と牧伯等とを我も與へよと言たりし士師等ハ今いづくにかあるわれれ怒をもて汝に王を興へ
 憤恨をもて之をうばひたりエホバの不義ハ包まれてありろの罪人をさめたくはべられたり
 勞おかくれる婦のみなしみに之に脚まん彼ハ愚なる子あり時に臨みてもなは産門に入らず我かれらを陰府
 の手より隠せん我かれら之を死より贖はんは死よ贖はんは死よななな方の疫ハ何處もあるか陰府よあなた方の災ハ何處にある

九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇 一〇〇一 一〇〇二 一〇〇三 一〇〇四 一〇〇五 一〇〇六 一〇〇七 一〇〇八 一〇〇九 一〇一〇 一〇一一 一〇一二 一〇一三 一〇一四 一〇一五 一〇一六 一〇一七 一〇一八 一〇一九 一〇二〇 一〇二一 一〇二二 一〇二三 一〇二四 一〇二五 一〇二六 一〇二七 一〇二八 一〇二九 一〇三〇 一〇三一 一〇三二 一〇三三 一〇三四 一〇三五 一〇三六 一〇三七 一〇三八 一〇三九 一〇四〇 一〇四一 一〇四二 一〇四三 一〇四四 一〇四五 一〇四六 一〇四七 一〇四八 一〇四九 一〇五〇 一〇五一 一〇五二 一〇五三 一〇五四 一〇五五 一〇五六 一〇五七 一〇五八 一〇五九 一〇六〇 一〇六一 一〇六二 一〇六三 一〇六四 一〇六五 一〇六六 一〇六七 一〇六八 一〇六九 一〇七〇 一〇七一 一〇七二 一〇七三 一〇七四 一〇七五 一〇七六 一〇七七 一〇七八 一〇七九 一〇八〇 一〇八一 一〇八二 一〇八三 一〇八四 一〇八五 一〇八六 一〇八七 一〇八八 一〇八九 一〇九〇 一〇九一 一〇九二 一〇九三 一〇九四 一〇九五 一〇九六 一〇九七 一〇九八 一〇九九 一一〇〇 一一〇一 一一〇二 一一〇三 一一〇四 一一〇五 一一〇六 一一〇七 一一〇八 一一〇九 一一一〇 一一一一 一一一二 一一一三 一一一四 一一一五 一一一六 一一一七 一一一八 一一一九 一一二〇 一一二一 一一二二 一一二三 一一二四 一一二五 一一二六 一一二七 一一二八 一一二九 一一三〇 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四 一一三五 一一三六 一一三七 一一三八 一一三九 一一四〇 一一四一 一一四二 一一四三 一一四四 一一四五 一一四六 一一四七 一一四八 一一四九 一一五〇 一一五一 一一五二 一一五三 一一五四 一一五五 一一五六 一一五七 一一五八 一一五九 一一六〇 一一六一 一一六二 一一六三 一一六四 一一六五 一一六六 一一六七 一一六八 一一六九 一一七〇 一一七一 一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八 一一七九 一一八〇 一一八一 一一八二 一一八三 一一八四 一一八五 一一八六 一一八七 一一八八 一一八九 一二〇〇 一二〇一 一二〇二 一二〇三 一二〇四 一二〇五 一二〇六 一二〇七 一二〇八 一二〇九 一二一〇 一二一一 一二一二 一二一三 一二一四 一二一五 一二一六 一二一七 一二一八 一二一九 一二二〇 一二二一 一二二二 一二二三 一二二四 一二二五 一二二六 一二二七 一二二八 一二二九 一二三〇 一二三一 一二三二 一二三三 一二三四 一二三五 一二三六 一二三七 一二三八 一二三九 一二四〇 一二四一 一二四二 一二四三 一二四四 一二四五 一二四六 一二四七 一二四八 一二四九 一二五〇 一二五一 一二五二 一二五三 一二五四 一二五五 一二五六 一二五七 一二五八 一二五九 一二六〇 一二六一 一二六二 一二六三 一二六四 一二六五 一二六六 一二六七 一二六八 一二六九 一二七〇 一二七一 一二七二 一二七三 一二七四 一二七五 一二七六 一二七七 一二七八 一二七九 一二八〇 一二八一 一二八二 一二八三 一二八四 一二八五 一二八六 一二八七 一二八八 一二八九 一二九〇 一二九一 一二九二 一二九三 一二九四 一二九五 一二九六 一二九七 一二九八 一二九九 一三〇〇 一三〇一 一三〇二 一三〇三 一三〇四 一三〇五 一三〇六 一三〇七 一三〇八 一三〇九 一三一〇 一三一〇

か悔改りかくれて我目のみえず 彼ハ兄弟のあかにて果を結ぶと多けれど風吹きたりエホバは
息荒野より吹去らした之がたためにの泉の乾るの源ハ涸るの積蓄とへたるもろくの寶貴器皿ハ搦め
奪たるべし「カ」リハアの神にろむきたれを刑せられ劍に斃れたる子の嬰兒ハなげくだれるの孕たる
婦ハ剖れん
「イ」ラエエルよ汝の神エホバに歸れよ汝ハ不義のために仆れたり 汝ら言詞をたつさへ來
りエホバに歸りていへ諸の不義ハ勅して善とを學納たまへ斯て我らハ唇をもて牛のごとくに汝に戯
げん「フ」スリヤハわれらを援じ我らハ馬に騎たまふたぐび我儕みづからの手おて作れる者にむかひ
われ神なりと言じ孤兒と爾によりて憐憫を得べければなりと 我これらの叛逆を醫し慨ひて之を愛せん
我の怒りハかれを離れまたり 我「イ」ラエエルに對してハ露のごとくならん彼ハ百合花のごとく花さきレバ
「ソ」のごとく根をばらん 木の枝ハ茂りひろがる其葉ハ鹿の樹のごとく 木の枝ハ茂りひろがる其葉ハ鹿の樹のごとく
くならん 木の枝ハ茂りひろがる其葉ハ鹿の樹のごとく 木の枝ハ茂りひろがる其葉ハ鹿の樹のごとく
レバソの酒のごとくなるべし「エ」ラ「イ」よといふ我また偶像と何のわづかる所あらんやと我てこれに應
へたり我れを願みん我ハ善祭の松のごとく汝れより果を得ん 誰か智慧ある者かこの人ハこの事を
曉らん誰か頭悟ある者ぞこの人ハ之を知んエホバの道ハ凡て直し義者ハ之を歩む然と罪人ハ之に隨かん

本節五〇六
一節五〇九
二節五〇九
三節五〇九
四節五〇九
五節五〇九
六節五〇九
七節五〇九
八節五〇九
九節五〇九
一〇節五〇九
一一節五〇九
一二節五〇九
一三節五〇九
一四節五〇九
一五節五〇九
一六節五〇九
一七節五〇九
一八節五〇九
一九節五〇九
二〇節五〇九
二一節五〇九
二二節五〇九
二三節五〇九
二四節五〇九
二五節五〇九
二六節五〇九
二七節五〇九
二八節五〇九
二九節五〇九
三〇節五〇九
三一節五〇九
三二節五〇九
三三節五〇九
三四節五〇九
三五節五〇九
三六節五〇九
三七節五〇九
三八節五〇九
三九節五〇九
四〇節五〇九
四一節五〇九
四二節五〇九
四三節五〇九
四四節五〇九
四五節五〇九
四六節五〇九
四七節五〇九
四八節五〇九
四九節五〇九
五〇節五〇九

「ト」エルの子ヨエルに歸めるエホバの言 老たる人よ汝ら是を聽けすべ此地に住む者汝ら
耳を傾けよ汝らの世ある汝らの先祖の世にも是のごと事ありしや 汝ら之を子に語り子にまた之を
子の子に語りうの子之を後の代に語りつたべよ 豎くらハ蝗虫の遣せる者ハ群ある蝗虫のくらハ所どな
らうの遣せる者ハかめつぐすおはねむしのくらハ所どなりうの遣せる者ハ噴けらば噴け食ふ所どな
れり 醉る者よ汝ら目を醒して泣けすべ酒をのむ者よ哭きさけべわたらしき酒かなちらの口を絶え
れどかり 入りてどある民わの國に攻よすれハ入りうの勢ハ強くろの勢ハかられず、うの齒ハ獅子の齒
のごとくろの牙ハ牝獅子の牙のごとし 彼等わが葡萄の樹を荒しわが無花果の樹を折りうの皮をさば
だかして之を棄つろの枝白くなれり 汝ら哀哭がかしめ貞女の若かりしときの夫のゆゑに麻布を腰
おまどひて哀哭がなむしむがごとくせよ 素祭濯滌どもエホバの家を絶えエホバに事ふる祭司等哀傷を
なす 田ハ荒れ地の荒傷む是穀物荒はて新しき酒つき油たえんとすれハあり 此むき大むきのごとも
て農夫羞ハ葡萄つくり哭よ田の禾稼よせよたれたレハあり 葡萄樹ハ枯れ無花果樹ハ萎れ石椰子林橋ハ
よび野の諸の樹ハ凋みたり是をもて世ハ人の喜樂がれしやせぬ 祭司よ汝ら麻布を腰にまどひてさきかな
しめ祭壇に事ふる者よ汝らなきさげべ神も事ふる者よかなちら來り麻布をまどひて夜をすてせ、其ハ素
祭も濯滌も汝らの神の家に天ごどあらざればなり 汝ら斷食を定め集會を設け長老等を集ハ國の居民を
近く暴風のごとくも全能者より來らん 我らがまのあたりに食物絶えにわらずや我らの神の家に歡喜と

一節二〇七
二節二〇七
三節二〇七
四節二〇七
五節二〇七
六節二〇七
七節二〇七
八節二〇七
九節二〇七
一〇節二〇七
一一節二〇七
一二節二〇七
一三節二〇七
一四節二〇七
一五節二〇七
一六節二〇七
一七節二〇七
一八節二〇七
一九節二〇七
二〇節二〇七
二一節二〇七
二二節二〇七
二三節二〇七
二四節二〇七
二五節二〇七
二六節二〇七
二七節二〇七
二八節二〇七
二九節二〇七
三〇節二〇七
三一節二〇七
三二節二〇七
三三節二〇七
三四節二〇七
三五節二〇七
三六節二〇七
三七節二〇七
三八節二〇七
三九節二〇七
四〇節二〇七
四一節二〇七
四二節二〇七
四三節二〇七
四四節二〇七
四五節二〇七
四六節二〇七
四七節二〇七
四八節二〇七
四九節二〇七
五〇節二〇七

快樂絶しにわらふ種人士の下に朽ち倉人墳穴の埋るる穀物ほらばされればありいかに奮闘
の哀み鳴や年の群ハ亂れ迷入草あければあり半の群もまた死喪ハエホバよ我かなげに向ひて呼ばら
ん其ハ水の流瀾どわれば草火にてやけつればあり
汝ハシャオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかく之を吹鳴せ國の民みな慄ひわなかならんハエ
の山々にたあびくが如し翳おほく勢さかなふる民われいたらんかかふる者いにしへよりありし
この年くわの代々の年にもあることなかるべし水彼らの前を燃き火燭かれらの後にもゆるの過ぎる
前ハ地エマソンのでとくらの過しをち荒はてる野の如し此のしがれらるもの一としてあることなかる
彼らの狀ハ馬のかたちのでとく其馳ありてと入り軍馬のたどしらの山の嶺にとびをせる音ハ車の轟聲
がどした火の輝燦をやくかとのでとくとしてその様強き民の行伍をたてて戰陣のどむに似たり
のむかふとこ諸民驚愕の面みな色を失ふ彼らハ勇士のどむに趨るる軍人のどむに石垣に攀
のばる彼ら各々のが道を進みゆきてその列を亂さす彼ら互に推おさす各々の道にまたひて進み
行く彼らハ刃に觸るるも身を害さす彼らと邑をかけめり石垣の上に奔り家に攀登り盜賊のどむに
忿より入りるのむかふとこ地ゆるき天震ひ日月も暗くなり星の光明を失ふエホバの軍勢の
前にて聲をわげたまふ其軍旅はなはた大あればなり其言を爲さぐる者ハ強しエホバの日ハ大にして甚
畏るべき故に誰かこれに耐ることを得んや然ぞエホバ言たまふ今にても汝ら斷齋と哭泣と悲哀とを

あし心をつくと我に歸れ汝ら水を裂きして心を裂き汝等の神エホバに歸るべし彼の思慮かり憐憫
りかつ怒ることをゆるく愛憐大にして災害をなすを悔たまふかり誰か彼のあむひに身歸り悔て禱をさ
の後にどめこのし汝らをして素祭と滌祭とをなせむをなせむをなせむをなせむをなせむをなせむをな
シャオンにて喇叭を吹きならし斷食を定め公會をよびつどへ民を集めろの會を續くし老たる人をのつめ
孩童と乳哺子を集め新郎をの室より呼いだし新郎をのの密室より呼いだせ而してエホバに事ふる祭
司等の扉と祭壇の間にて泣いて言へエホバよ汝の民を救たまへ汝の産業を恥辱せめらるるに任せ之を異
邦人に治めさす勿れ何異邦人をして彼らの神ハ何處にあると云しむべけんや然ぞバエホバの地
のために嫉妬を起しその民を憐たまたまへんエホバ應へてその民に言たまへん願よ我我穀物とわたらしき
酒と油を汝にかくる汝ら之に飽ん我なんからをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ我北より
きたる軍を遠く汝らより離れ汝らめらるるはひき荒地に逐やらん其前軍を東の海にののの海に入
んうの臭味立ちの惡嗅騰らん是は大なる事を爲たるに因る地よ懼るる勿れ喜び樂しめエホバ大なる
事をを行なひたまふなり野の豐よ懼るる勿れわぬ野の牧草の牧草もえいで樹に果を結び無花果葡萄樹の
の力をめさすなりシャオンの子等と汝らの神エホバによりて樂め喜べエホバハ秋の雨を適當かなげらに
賜ひまた前のおどく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せたまふ打境に穀物豊かに獲にいわたらばき酒
と酒溢れん我が汝らに遣てし大軍すなぞ群ぬる蟬めつてくす蝗喚はるばす蝗喚くらん蝗の蝮から
せる年をわれ汝らに贈るとん汝らハ食ひ食ひて飽きよのつねからまたを待たせむし汝らの
神エホバの名をほめ頌へん我民はこそし人にして辱しめらるることなかるべしかくて汝らハ「スラニル

ヨザ

一	三十一
二	三十二
三	三十三
四	三十四
五	三十五
六	三十六
七	三十七
八	三十八
九	三十九
十	四十
十一	四十一
十二	四十二
十三	四十三
十四	四十四
十五	四十五
十六	四十六
十七	四十七
十八	四十八
十九	四十九
二十	五十

ヨセ

一	五十一
二	五十二
三	五十三
四	五十四
五	五十五
六	五十六
七	五十七
八	五十八
九	五十九
十	六十
十一	六十一
十二	六十二
十三	六十三
十四	六十四
十五	六十五
十六	六十六
十七	六十七
十八	六十八
十九	六十九
二十	七十

ヨブ

一	七十一
二	七十二
三	七十三
四	七十四
五	七十五
六	七十六
七	七十七
八	七十八
九	七十九
十	八十
十一	八十一
十二	八十二
十三	八十三
十四	八十四
十五	八十五
十六	八十六
十七	八十七
十八	八十八
十九	八十九
二十	九十

